

[研究ノート] 経済思想家としてのジョージ・バークレイ(2) : バークレイの経済書をめぐって

著者	戒田 郁夫
雑誌名	関西大学経済論集
巻	21
号	1
ページ	73-97
発行年	1971-04-20
その他のタイトル	[Note] George Berkeley as Economist (2)
URL	http://hdl.handle.net/10112/15056

研究ノート

経済思想家としてのジョージ・バークリイ (2)

—バークリイの経済書をめぐって—

戒 田 郁 夫

II バークリイの経済書

バークリイが生涯に執筆した多数の著書・論文等のなかで、直接間接に、経済問題を取り扱ったものは次の7つにすぎない。¹⁾

- (1) *An Essay towards preventing the Ruine of Great Britain*. London, 1721.
- (2) *Alciphron: or, the minute Philosopher. In seven dialogues*. 2 vols. London, 1732.
- (3) *The Querist, containing several Queries proposed to the consideration of the Public*. 3pt. Dublin, 1735—37.

1) *The Works of George Berkeley*, Bishop of Cloyne. 9 vols. Edited by A.A. Luce and T.E. Jessop. London: Nelson, 1948—1957. reprinted 1964. (以下 *Works* と略す) では、(2) の『アルキフロン』(第3巻所収)を除いて、他はすべて第6巻に掲載されている。但し、(4)の『国立銀行に関する諸質問』は『質問者』からの抜萃であり、質問事項に関しては第9巻の補遺で説明されている。(Works, IX. p. 159.)

なお、上記のもの以外に、1733年にロンドンで出版され、翌年ダブリンで再版された29ページの小冊子、“*A Proposal For The Relief Of Ireland, By A Coninage Of Monies, of Gold, and Silver; And establishing a National Bank*” が、ワグナーによれば、「著者は不明だが、恐らくバークリイ師のものと思われる」と。(Henry R. Wagner, *Irish Economics: 1700—1783*. London, 1907. (Reprinted 1969 by A.M. Kelley. p.44.) もつとも、このパンフレットは、L.W. Hanson, *Contemporary Printed Sources for British and Irish Economic History, 1701—1750*. Cambridge, 1963. p.493. にも掲示されているが、著者については全く触れていない。

- (4) *Queries relating to a National Bank*, Extracted from “*The Querist*”. Dublin, 1737.
- (5) Letter on the Project of a National Bank. In *Dublin Newsletter*, 2—5 April, 1737, and same date in *Pue’s Occurrences*.
- (6) *The Irish patriot or Queries upon Queries*. c. 1738.
- (7) *A Word to the Wise: or, an Exhortation to the Roman Catholic Clergy of Ireland*. Dublin, 1749.

このうち、『アルキフロン』は「対話Ⅱ」で道徳と經濟の問題に触れたものであり、また(4)の小冊子(40ページ)と(5)の公開状、そしてパークリィの死後発見された(6)の小冊子はいずれも(3)の『質問者』と一部重複ないし関連したものであるので、パークリィの經濟論に関する著作と云えば、結局、(1)の『大ブリテンの破滅を防ぐために』、(3)の『質問者』、および(7)の『賢者に一言』の3つということになる²⁾。もつとも(1)と(7)は主題が道徳と神学に関するものであって、『質問者』のように直接アイルランドの經濟問題を対象としたものではない³⁾。しかしながら、彼の經濟思想を跡づけるうえで、無視できない地位をしめている。

A 『大ブリテンの破滅を防ぐために』の成立事情

1720年の晩秋にパークリィが2度目の大陸旅行(1716—'20)を終えてロンドンに帰着したとき、この国は南海泡沫事件 the South Sea Bubble の勃発で騒然としていた。

ところで、この事件は当時のイギリス政府の借入れ方式と極めて密接な関係がある。イギリスでは、名譽革命によって創設された新しい公債制度のもと、18世紀の「第二次百年戦争」遂行のため、国債が戦費調達に大きなウェイトをしめたことは周知の通りである。その際、少なくとも当該事件の勃発までは、特權会社の創設による借入れ方式が確立され

2) Cf. *Works*, VI. p. 91. & Ian D. S. Ward, George Berkeley: precursor of Keynes or moral economist on underdevelopment? (*Journal of Political Economy*. vol. LXVII, no.1. Feb., 1959. p. 31, fn. 3.)

3) 『賢者に一言』もアイルランド問題を直接取り上げたものであるが、しかし「アイルランドのローマ・カソリック教の聖職者に対する勧告」という副題の示すように、そこでは、主に聖職者が卒先してアイルランド人の道徳改革を導くよう彼らに訴えたものである。では、アイルランドの經濟問題とは一体なになのか。それは、Jacob Viner が云うように、「アイルランド問題は……經濟学徒にとって、まずなによりもアイルランド人の貧困問題であった。」(R.D.C. Black, *Economic thought and the Irish question, 1817—1870*. Cambridge, 1960. p.v.)

ていた。スペイン王位継承戦争(1701—13)によって約3,600万ポンドに累積した国債のうち、殆んど半分が、イングランド銀行(1694)、東インド会社(1708年、新インド会社と合併)、南海会社(1711)の三特権会社から借入れたものであると伝えられている⁴⁾。

アウグスブルグ同盟の戦いの終った1697年に1,670万ポンドであったイギリスの国債累積額が、1710年には2,140万ポンドに達した。当時、政府は公信用の確立と負担の軽減をはかるため、国債構成のうえで大宗をしめていた各種の流動債⁵⁾を低利借換えによって整理統合しようとしていたが、このような目論見は、戦費調達のための資金貸付という機能をもつ既存の特権会社の利害に反するので、公債管理のための資金貸付という別個の機能⁶⁾をもつ新しい組織を設立する必要に迫られた。かくして1711年、時の大蔵大臣オックスフォード伯ハーレー(Robert Harley, 1161—1724)によって創設されたのが南海会社 South Sea Company であった。南米における貿易独占権を与えられる代りに、既発の流動債の大半⁷⁾を引受けたこの国策会社⁸⁾は、順調な業績を背景にして、1720年1月、当時の大蔵大臣サンダーランド(Charles Spencer Sunderland, 1674—1722)にいわゆる南海計画^{スキーム}を提案した。この計画は、イングランド銀行と東インド会社の所有する国債を除

4) E.L. Hargreaves, *The National Debt*. London, 1930. pp. 9-10. & George Clark, *The Wealth of England from 1496 to 1760*. London, 1954. pp. 179—180.

5) 当時の国債構成と残高 (単位:10万ポンド)

年	確定公債	流動公債	計
1692		3.3	3.3
1697	3.4	13.3	16.7
1710	7.3	14.1	21.4
1711	11.8	10.6	22.4
1714	27.8	8.4	36.2
1720	49.8	4.1	53.9

出所: *Abstract of British Historical Statistics* by B. R. Mitchell with the collaboration of Phyllis Deane, Cambridge, 1962. p. 401の表より抽出。

6) Hargreaves, *op. cit.*, pp. 19-20.

7) 資本金9,177,968ポンド相当額。(Ibid., p. 20)

8) 南海会社の初代総裁はオックスフォード伯であり、1718年にはジョージ1世も名儀だけとは云え、総裁に就任していた。このため、南海計画が議会を通過したとき、「国民は会社と政府がなれあいであるという印象を受けた。」(J. Carswell, *The South Sea Bubble*. London, 1960. p. 73.)

くすべての国債を低利に借換える目的で発行される国債⁹⁾を南海会社が全額引受け、その代りに貿易独占の拡大を認めてもらうという主旨のものである。これによって既存の特権会社のなかで優位に立とうとする野心に燃えていた同社は、法案の議会通過に全力を傾注し、議会と大臣や宮廷筋にくまなく多額の賄賂をばらまいて、ようやく1720年4月にこの案の立法化に成功した。同社と政界、官界および宮廷との癒着ぶりは、後に金融危機が深刻化し大きな社会問題をひきおこしたとき、人々の非難するところとなり、1721年初頭には同社の理事数人と若干の大臣が買収や汚職の容疑で裁判にかけられるという不祥事件にまで発展した。パークリィも『大ブリテンの破滅を防ぐために』のなかで、当時行なわれた大規模な買収と偽証に對しのろいをこめて言及しているように、議会や宮廷の「おえら方 high personage の多くが、あくどい程の不当利得や背任行為に關係しながら、それら一切の罪を違法と認めなかった」ので、国民の憤りは今にも爆発しそうになったと伝えられている¹⁰⁾。

さて、自社株の値上りと貿易の増大で国債引受けによる損失を相殺しようと目論んだ南海会社は、自社の株価を巧みに操作して値上りを計ったが、期待通り株価が1720年8月には10倍にもなった。その結果、急激にギャンブル熱が蔓延し、人々は国富の醜い奪い合いに熱中しだした。類似の会社が雨後の筍のように群生し、わずか2、3カ月のあいだに、何億ポンドの資本をかき集めるという狂気じみた情景があらわれた。放っておいても倒産の運命にあった多数のインチキ会社は、同年8月の泡沫会社規制法 Buble Act の公布によって崩壊が早められた。次々に倒産して行く会社の株主は、殆んどが南海株を処分してその金で債務を弁済しなければならなかった。かくて南海株は暴落をはじめ、9月に入ると本格的なパニックが到来した。何千人もの人々が破産の浮目にあい、そのなかには多くジェントリイの貴族や地主が含まれていた。かわってロパーヒンの人物が頭角をあらわし、ポンドこそわが命という‘エコノミック・アニマル’が横行し始めた。南海計画の下院における有力な反対者、ウォルポール (Robert Walpole, 1676—1745) はこの模様を次のように語っている。「この計画は、わが国民の特性を貿易や産業からそらせることによって株の売買という有害な慣行を奨励した。すなわち、それは誤った予想収益によって、また労働に

9) Hargreaves, *op. cit.*, p. 28. & fn. 2.

10) *Works*, VI. p. 64. なおこの部分の叙述の多くは、*Works*, VI. のジェソップによる編集者序 (pp.63-65) と *Works*, IX. p. 46 の「書簡に対する評注」に負っている。

よる堅実な稼ぎを捨てて一獲千金の夢を追わせ、不注意に国民を破滅にさそいこむための危険なわなを差し出すものであった。」¹¹⁾

パークリイが4年振りに見たのは、このような病めるイギリスであった。物質的な向上の背後に軽薄な投機熱に浮かされてほとばしり出た病める精神が、貴賤を問わず人々の心のすみずみにまで浸みわたり、そこには一片の公共心もみられないこの国に末世の近づきつつあるように、彼には思えたのである。イギリスをも自らの祖国と思っていた彼はこれを黙視することができなかつた。1721年、彼が36才のときにロンドンで出版した『大ブリテンの破滅を防ぐために』というタイトルのパンフレットはこういう事情の下で陽の目をみたのである。この国の悪の根源を長期にわたってかなでられた倫理と宗教の衰退に求め、泡沫事件はその結果であり徴候にすぎないとみて、「今や忘れ去られている宗教、勤労、質素および公共心に関する昔から云いふるされた格言」¹²⁾に頼る以外にはこの国の破滅を防ぐことができないということから説き始めるこの匿名のパンフレット¹³⁾の主張に、モラリストとしてのパークリイの面目躍如たるものがある。しかしこの論文は単なる道德復興の呼びかけに終始したものではない。精神の歪みだけでなく、経済の歪みを正すために、彼は具体的な提案を行なっているのである。そのなかには、後年、彼がアイルランドを絶望的な貧困状態から脱却させるために書いた処方箋、『質問者』で行なった勸告を先取りしたものがある。また通常、パークリイを重商主義批判者として位置づける際に、しばしば『質問者』から引用される「人間の労働が富の真の源泉」というフレーズによって示される彼の経済思想の一面は、この論文のなかにも見出すことができる¹⁴⁾。したがって、『質問者』がイギリスの植民地であるアイルランドの経済問題を取扱っているのに対して、『大ブリテンの破滅を防ぐために』は、アイルランドの征服者イギリスを対

11) *Works*, VI. p. 64. なお、ウォルポールは、南海泡沫事件によって倒れた第1次ウィッグ内閣の後をうけて首相に就任してから、1,800万ポンドの南海株をイングランド銀行と東インド会社に肩代りさせて南海会社の信用を回復することによりパニックを終息に導いた。

12) *Works*, VI. p. 69.

13) パークリイの著書・小冊子類には匿名のものが多いが、しかしそれはパークリイに限ったことではない。この時期の出版物、とりわけ経済に関するものに匿名が多かった理由については、三上隆三「科学としての経済学の成立—ジョセフ・マッシーの貢献—」(『経済評論』1963年6月号, 123—125ページ)を参看せよ。

14) 「勤労は富への自然で確実な方法である。」(*Works*, VI, p. 71)

象としているという違いはあるけれども、後者はバークリイがエコノミストとして最初に手がけた経済論であり、そして基本的には前者の先駆的性格をもつものである、と考へても差しつかえない¹⁵⁾。

B 「ウッドの半ペンス貨」事件とバークリイ

南海事件をまのあたりに見て、イギリス人の精神的頹廢に痛く失望したバークリイが、遠き西方の國にキリスト教文化の新しい拠点を築くべく、いわゆる「バーミューダ計画」の立案に没頭していたころ、アイルランドでは、同じ南海事件で失脚したサンダーランドの後を受け、ウィッグ全盛時代へ向かって歩み始めたばかりのウォルポール内閣(1721—'42)を早々と危機におとしめ、アイルランドの政治的地位に関する問題の一切をるつばに投じた、いわゆる「ウッドの半ペンス貨」Wood's Halfpence 事件が発生していた¹⁶⁾。

周知のように、18世紀初頭のアイルランドはしばしば鑄貨の不足に悩まされていた。もともとアイルランドは、貨幣の素材となる貴金属の乏しいところへ、イギリス政府によって課せられた産業及び交易に対する諸制限のために金属貨幣の流入が減少する一方、イギリス駐留軍の経費を負担したり、イギリス本国に居を構える多数の不在高級官吏や不在地主に多額の俸給や年金および貨幣地代を支払わなければならなかったため、金属貨幣は絶えず国外へ流出し、慢性的な鑄貨の不足が生じていた。このような主としてイギリスの収奪にもとづく本位貨幣の欠乏に加えて、生活貨幣としての小額銅貨も窮迫していた。生活水準の低かったアイルランド人にとって、小銭の必要性は殊のほか大きかったのである。こうして、1722年に小額銅貨の供給が決定されたのであるが、この仕事を引受けたのが、半ペンス貨とファージング貨のアイルランド銅貨鑄造の特許権を与えられていた、國王ジョージ1世(在位、1714—'27)の情人のひとり、ケンダル公爵夫人から1万ポンドで

15) 例へばハチスンによると、1721年のこの論文は「その大体の輪郭が後に『質問者』のなかでおこなった提案とよく似ている。」(T.W. Hutchison, Berkeley's Querist and its place in the economic thought of the eighteenth century, *The British Journal for the Philosophy of Science*. vol. IV, no. 13. May. 1953. p. 54)

16) 以下の「ウッドの半ペンス貨」事件の概略については、D.A. Chart, *An Economic History of Ireland*. Dublin, 1920. pp. 166—167. R. Dunlop, *Ireland in the Eighteenth Century*. (*The Cambridge Modern History*, vol. IV, 1934. pp. 484—485) B. Williams, *The Whig Supremacy, 1714—1760*. Oxford, 1962. pp. 300—303. 参看。

特許権を譲り受けたイギリス人の鉄商人、ウィリアム・ウッドであった。エドワード6世(在位、1547—'53)の時代以降、政府直轄の貨幣鑄造所の1つもなかったアイルランドでは、幾人かの民間人が政府から貨幣鑄造権を得て、必要な貨幣量を供給することが慣例となっていたので、それ自体は決して珍らしいことではなかった。それにもかかわらず、ウッドに関するニュースが伝播するや、ダブリンでは大規模な騒動がもち上った。特許状の規定通りに鑄造してもなおかつウッドには4万ポンドの利益が見込まれるのに、ウッドの銅貨は銅の含有量をごまかしたものであったので、彼の手にはかなりの不当利益が残るはずであった。更に、当時のアイルランド貨幣の流通量は総額わずか40万ポンドであったが、そこへ $\frac{1}{4}$ に相当する10万800ポンドもの銅貨を投入すれば、国内にある金銀が海外へ流出し、アイルランドは一層貧しくなるという主張がなされた。しかもこれと同じような経験をダブリン市民はすでに30年前に体得しているのである。

1690年に、大僭王ジェームズ2世(在位、1685—'88)が王位奪回をねらって、自ら軍を率いアイルランドに上陸し、ポイン Boyne の戦い前のほんの短時日ダブリンに駐留したとき、彼は兵士に給料を支払うため、家庭用品やこわれた鐘、古い鉄砲等を回収、その銅、しんちゅう、錫、ピューターを利用して貨幣を鑄造した。そして4ペンスの価値しかないこの鑄貨に5ポンドの名称を与えて、強制的に流通させたので、ダブリンの商店で倒産するものが続出したという事実があった。こういう悪夢に悩まされたダブリン市民が何かにつけてアイルランドを喰いものにするイギリス人に対し憎しみの声を挙げたのもけだし当然であろう。

ウッドの特許権に反対するものは一般市民だけではなかった。この問題でツンボ棧敷におかれていたアイルランド議会も最高法院と共に反対を表明し、急拠ロンドンへ陳情団を送り出した。ウォルポールはこれに対して、ウッドの半ペンス貨の流通額を4万ポンドに引下げるところまで譲歩したが、それでもアイルランドの世論は鎮まらなかった。パークリイと因縁浅からぬスウィフト¹⁷⁾(Jonathan Swift, 1667—1745)の『ドレイビ

17) パークリイより8才年長のスウィフトは小学校、大学共にパークリイの先輩であり、また同派の牧師としてもそうである。更にスウィフトは、彼がかつて家附司祭兼秘書として仕えていたストラトンのパークリイ伯に若きパークリイを次のような言葉で紹介している。「閣下、この方は貴下の御一門の若き紳士であります。小生は、この方が貴下の御一門であることよりも、貴下がこの方と御姻戚であられることのほうが無上の光栄と存じあげる次第であります。」(A.C. Fraser, *Life and Letters of George Berkeley*. Oxford, 1871. p. 6n. — quoted in

ア書簡¹⁸⁾が現われたのも、丁度このような興奮の真只中であつた。1725年8月、イギリス政府の完敗に終るまで、あらゆる階層のアイランド人を反英運動にかりたて、ウィッグ体制を震撼せしめた、このアイリッシュ嫌いのアングロ=アイリッシュが、アイランドの英雄にまつりあげられたのはまさに歴史の皮肉と云えよう。

ところで、この事件が単なる貨幣問題にとどまらず、‘アイランド独立のための最初の大闘争’¹⁹⁾としてあらゆる階層のアイランド人をまきこむ程、アイランドにとって画期的な大事件であつたにもかかわらず、この問題とパークリイとの関係は極めて稀薄である。しかも、それは彼がこの事件を知らなかつたからではない。彼はこの事件の最盛期にアイランドへ帰っており、ダブリンの騒動をつぶさに観察しているのである²⁰⁾。さらに後年、『質問者』の執筆にあたり、パークリイの利用したと推測されているスウィフトのパンフレットのなかに、1724年の『ドレイピア書簡』が含まれていることからみても²¹⁾、彼が決してこの事件に無関心であつたとは思われないのである。だとすれば、なぜパークリイはウッズの事件について、少なくとも公式上沈黙を守りつづけたのであろう

J. O. Wisdom, *An Outline of Berkeley's Life*. (*The British Journal for the Philosophy of Science*, vol. IV, no. 13, May. 1953. p. 79)。もっと奇しき因縁は、パークリイが1723年にスウィフトの恋人の1人、エスター・ヴァナムリの遺産相続人として3千ドルをうけとり、パーミュダ計画の資金に加えたことである。(Wisdom, *ibid.*, p. 80. & Williams, *op. cit.*, p. 91)

- 18) 『ドレイピア書簡』に関しては、岩波新書の中野好夫『スウィフト考』(1969)所収の“スウィフトと「ドレイピア書簡」”のすぐれた解説を参看せよ。
- 19) グッドウインはこのような見方を否定している。 Cf. A. Goodwin, *Wood's Halfpence*. (*The English Historical Review*, vol. LI, no. CCIV, Oct., 1936. pp. 647—674)
- 20) パークリイは、彼のパーミュダ計画の熱心な支持者であり、よき友であるパーシヴァル (John Percival, 1683—1748) にあてて、スウィフトの「第4書簡」の出た約1月前の1724年9月9日、ダブリンから次のような内容の手紙を出している。
- 「昨日ウッズの呪詛人形をつるし首にしたり火あぶりにしたりするため、群衆が徒党を組んで人形を掲げながら、この街のほとんどの通りをデモりました。しかし、ダブリン市長がウッズの刑の執行を水曜日まで延ばしたと、彼らは云いふらしております。あらゆる階層の人達がみせた憤りをこの文面でしめすことは殆んど不可能でございます。」 (*Works*, VIII. p. 135)
- 21) *Works*, VI. p. 105 fn.

か²²⁾。パークリイのそれに関する見解を直接確かめる資料はないけれども、もしも推測が許されるならば、次のように考えることができるのではなからうか。

ウッドの事件が、1722年から25年にかけてアイルランドを興奮のつぼに投じていたとき、ダブリンに帰っていたパークリイは、バーミューダ計画と、かてて加えて、ドロモアの副監督職をめぐる訴訟問題で、身辺これ多忙を極めていたようである。とりわけ、アメリカ・インディアン相手の宣教師を訓練し、植民者の習慣や品行を改めさせるため、バーミューダに大学を建て、そこをアメリカにおけるキリスト教文化の新しい中心地にしようという、いわゆるバーミューダ計画にかけた彼の意気ごみはすさまじく、当初は余世をバーミューダですごそうとさえ決心していた。この計画を実現するためには、多額の資金とイギリス議会の特許状が必要であった。そのための工作に彼は1724年9月、わざわざロンドンへ向け出発したほどである。このように当時のパークリイは、俗人ではとても考えられぬくらい悲壯で雄大な計画の立案とその実現に揮身の力をふるっていたので²³⁾、他に時間を割く余裕がなかったのであろう。

第2に、大学建設の特許状を入手し、政府補助金を得るためにも、ウォルポール内閣の機嫌を損することは不得策であるという政治的思惑が、パークリイの心情に働いたのではなからうか。

第3に、彼の親友の1人であり、バーミューダ計画の熱心なスポンサーでもあったパーシヴァル——ウッド事件の立役者であるスウィフトに嫌われていた——が当時のイギリス政府の確固たる支持者であったことも²⁴⁾、パークリイがこの事件に直接タッチしなかった理由の1つではなからうか。

第4に、民衆の心情に訴え、大声で激烈にアジリ、愛国者きどりでいるスウィフト等の積極的反対論者の言論と行動は、真の愛国心を‘心の問題’と考え²⁵⁾、知的で温和な性格²⁶⁾のパークリイにとって、余り快よく思われなかったのかも知れない。

22) ちなみに、‘ウッドの半ペンス貨’に関するパンフレットの数を、ハンソンの前掲書で調べてみると、1723年—3編、1724年—50編(うちスウィフトのもの8編)、1725年—10編(うちスウィフトのもの2編)であるが、これまでのところ、半ペンス貨問題についての白熱した論争にパークリイが直接参加した証左はない。

23) Wisdom, *op. cit.*, p. 80.

24) *Works*, IX. p. 55.

25) Maxims concerning patriotism. Dublin, 1750. in *Works*, VI. pp. 253—255.

26) パークリイの人柄については、Wisdom, *op. cit.*, pp. 82—83. を参看せよ。

第5に、ウィッグからトーリに転向し、ウィッグ憎さで一杯のスウィフトと異なり、トーリではあるけれども極めて党派性の稀薄なパークリイが、イギリスもアイルランドも共に祖国であるという、いわゆる二重の愛国心を強く意識していたこともこの問題と無関係ではなからう²⁷⁾。

さて、われわれはパークリイがウッド事件をめぐる問題について何ら公式の表明をしなかった理由を推測によっていくつかあげてきた。しかしながら、ウッド事件がパークリイにどのようなインパクトを与えたかは全くわからない。けれども、この事件が、それまで国外生活の比較的多かったパークリイを、少なくともアイルランドの現状に直接目を向けさせるきっかけとなったであろうことは十分に想像がつくのである。

C 『質問者』の成立事情

1731年10月30日、パーミュエダ計画に失敗してロンドンに帰ってきたパークリイは傷心にうちがれていた。1728年9月の初め、世界の標準時で知られるロンドン郊外のグリニッチ Greenwich の波止場から250トンの船で、アメリカへ旅立った新婚早々のパークリイとその一行が²⁸⁾、3年間のアメリカ生活に別れを告げ帰国せざるをえなくなったのは、彼らの待ち焦れていた約束の金、パーミュエダ計画に対するイギリス政府の補助金2万ポンドの届かないことが明らかになったからである。

ロンドンに帰ってから半年もけみしない1732年2月に、パークリイは例の『アルキフロン』を出版した。この本はパークリイがロード・アイランドのニューポートで、イギリスからの送金を待っているあいだに書きためたプラトン調の対話体の作品であるが、このなかで彼は、シャフツベリイ (Anthony Ashley Cooper, Earl of Shaftesbury, 1671—1713)、マンデヴィル (Bernard de Mandeville, c1670—1733)、コリンズ (Anthony Collins, 1676—1729) らの‘怯懦哲学者たち’ minute philosophers の‘自由思想’を指弾した。とりわけ「対話Ⅱ」において、マンデヴィルの‘私悪公益’説を批判し、奢侈に

27) *Works*, VI. p. vi. 名越悦『パークリ研究——非物質論の課題とその本質——』(昭和40年) 刀江書院, 69—70ページ。

28) パークリイは強力な結婚奨励者であった。彼が結婚したのは43才のときであったが、一夫一婦制が市民社会の倫理的原理として確立していなくて、未婚の女性や独身をおしとおす男性の多かった18世紀前半に、晩婚とは云え、彼が健全な家庭生活を営んだことは、すぐ後に来る一夫一婦制家庭の新しい時代を先駆けるものであった。内田毅「イギリスの小説」(『研究社英米文学史講座』第5巻, 昭和36年, 67—69ページ) 参看。

代って公共精神に立脚した個人の勤労と節儉を説いた²⁹⁾。更に1733年には、1709年に出版したパークリイの処女大作『視覚新論』*An Essay towards a New Theory of Vision*の続編である『視覚の理論』*The Theory of Vision*を出版した。このように書くと、パークリイは旅の疲れも厭わずはなばなしく活躍していたようにみえるけれども、実はそうでなかったのである。

傷心のパークリイを待ちうけていたのは、世間の冷い仕打ちであった。一時は狂人とさえ蔑まれ、一度決まりかけたダウン Downe の副監督職もアイルランド政府の反対で流れて失うという、まことに不遇な生活を彼は2年半も味わっていたのである。しかし彼にもやっと救いの手が差しのべられるときが来た。ジョージ2世 (在位, 1727—'60) の妃で、ウォルポールの強力な庇護者であったキャロライン Caroline の力ぞえて、彼は1734年1月、アイルランド南部に位置するコーク州クロイン Cloyne の監督に任命されたのである。王妃の好意に感謝しながら、彼は同じ年の4月末にロンドンを発ち、5月19日にダブリンに到着、夏の終りに任地へ赴き、自来1752年の夏、余世をイギリスで送るためにこの地を離れるまでの18年間をこの教区で自ら布教にあたと共に、その間執筆活動においても彼の本領を大いに発揮することになるのである³⁰⁾。

- 29) パークリイのマンデヴィル批判については、田中敏弘教授の労作『マンデヴィルの社会・経済思想』(昭和41年)有斐閣、第3章「マンデヴィルとパークリイ」を参看せよ。
- 30) パークリイの生涯における執筆活動を3期にわけ、処女作出版から2度目の大陸旅行までを第1期 (1707—'21)、バーミュダ計画の立案から失敗までを第2期 (1722—'33)、クロインの監督就任から死去するまでを第3期 (1734—'53)として、各期における出版物(再版を除く)の点数を調べてみると、次のようになる。このうち第2期の出版物は量的に劣るだけでなく、質的においても『アルキフロン』を除いて目ぼしいものはない。

期	生前出版されたもの	死後出版されたもの	計
I	10	9	19
II	4	1	5
III	26	3	29

(執筆年不明の3点を除く)

出所: *Works*, IX, pp. 147—151のパークリイ著作リストから作成。

さて、1728年の夏、生国アイルランドを離れて以来、彼が数年振りに見たこの国の現状はどうであったろうか。人口の80%をしめながら、土地は全体の5%以下しか所有していなかったローマ・カソリック教徒のアイルランド土着民は、新教徒の多かったイギリス系植民者の支配下にあり、自らの議会を持って市民権を享受していた彼ら植民者もイギリス議会の服従下にあるという、二重の政治・社会構造のもとで、ローマ・カソリック教に対する信仰だけを唯一の慰みとして、ただ惰性で生きているだけにすぎない老人、病弱者、気力のない者たちが貧困のふきだまりに身をまかせている一方、アイルランド産業の担い手としての植民者の側もイギリスの経済的警戒心によって諸種の制約をうけていた。この警戒心は当時のイギリスの国民産業である羊毛工業の保護に向けられた。「最も悪名高い条令の1つ」である1699年の条令によって、この国の羊毛工業は殆んど壊滅し、それ以来アイルランド全土に繁茂したのは貧困だけであった³¹⁾。ハチスンが云うように、それは「今日の経済学者なら、不況経済、窮乏地域、未開発国、収奪された植民地として区分すると思われる状態の組合わさった真只中に深く落ちこんでいた。」³²⁾

アイルランド特有の風景として、鐘楼と要塞を兼ねた円塔 Round Tower がこの国ではここかしこにみられるが、これはむかしデーン人の奇襲隊から町や村落を守るために建てられた名残りである。クロインにも周囲を高さ3フィート、厚さ8インチの壁をめぐらした90フィートの円塔が町の入口にあった。この町のほぼ中心部に在る展望館 the See House という名の監督屋敷にパークリイは居を構えた³³⁾。当時、牧師が自己の教区に住み、宗教活動を行なうのは珍しいことであった。イギリス本土においてさえも、地方の牧師は、自己の教区を低い俸給で働く副牧師にまかせ、みずからは牧師館で裕福な生活を送っていた時代である³⁴⁾。

クロインの静けさが彼に経済問題に対する長年の興味を発展させる機会を与えた。と同時に、彼がまわりから貧困と病苦を見出すのにそんなに時間はかからなかった。翌年彼は初めてアイルランドの経済問題をめぐり、貨幣と経済理論の基本問題をとりあつかった³⁵⁾

31) 『質問者』の社会・経済的背景については、拙稿「経済思想家としてのジョージ・パークリイ(1)——その人と時代背景——」(関西大学『経済論集』第18巻第3号、昭和43年8月、317-340ページ)を参看。

32) Hutchison, *op. cit.*, p. 52.

33) *Works*, IX. p. 91 & p. 132.

34) 岡本圭次郎「18世紀の世相」(『研究社英米文学講座』第6巻、昭和36年、201-2ページ)参看。

ンフレットを世に問うたのである。こうして生まれたのが『質問者』であった。パークリイ50才のときのことである。重商主義理論を体系化したジェームズ・ステュアートの『政治経済学原理』(1767)が、ステュアート55才のときの雄篇であり、社会科学史上最高の古典の1つである『諸国民の富』(1776)がアダム・スミス53才のときの不朽の名著であることを知れば、パークリイの小冊子と2人の大作を比肩することはかなり無理があるとしても、50才という齢も社会科学を研究する者にとってはそれほど障害にはならなかったことがわかるであろう。

それはさておき、われわれは次に『質問者』の文献解題に入らなければならない。幸にして、われわれには『パークリイ全集』の編者の1人であるジェソップ教授の綿密な考証にもとずく秀れた解題が与えられている³⁵⁾。したがって、ここでの叙述が教授の解題の紹介という域を出ないことは云うまでもない。

a. 初版の刊行 『質問者』はもともと1735年から37年にかけて、ダブリンにおいて匿名で出版された。第1部にあたるパンフレットの出版年は、間違っって1725年と印刷されているけれども、1735年12月9日の *Dublin Evening Post* に「只今発売中」just published という広告が出ているので、1735年12月頃と推定されている。第2部にあたるものは翌年の1736年に出版されたことは確かであるが、その出版月は不詳である³⁶⁾。第3部に相当するものは、その出版広告が1737年3月8日から12日までの *Dublin Newsletter* に掲載されているので、1737年3月頃出版されたものと推定されている。これら3分冊のパンフレットは、『質問者』の上梓に協力したパークリイの親友の1人であるダブリン在住のマドン博士 (Samuel Madden, 1686—1765) の編集ということになっているが、マドン自身そのことを知ったのは新聞を通してであった³⁷⁾。またこの3分冊のもの

35) *Works*, VI. pp. 89—100. & IX. pp. 100—102.

36) ジェソップ教授は第2部の出版月については何も触れていない。しかし ロンドン版の実現に貢献したパークリイの親友の1人であるパーシヴァル (John Percival, 1683—1748) の日誌の1736年5月27日の項に、「私はパークリイ監督の『質問者』第2部を再版するためにリチャードソン氏に送った」という文章があることや (*Works*, IX. pp. 100—101), 更にロンドン版の第2部の出版広告が *Gentleman's Magazine* の1736年6月号に掲載されたことから推測して、ダブリン版第2部の出版は1736年5月頃とみてよいのではなからうか。

37) パークリイは1737年3月5日のプライア宛の手紙のなかで、「今度も前の2冊のときと同じ編者 (マドン博士) の名を使いました」と書いている。 (*Works*, VIII. pp. 244—5)

を1冊に編集したのもマドンであると伝えられているが³⁸⁾、その点については確かでない。同じ1735年から1737年にかけて、ロンドンの出版業者ロバーツ (J. Roberts) によってダブリン本からの翻刻版がロンドンで発行された。

匿名で仮とじの初版本は相当な注目をひいたけれども、発行部数がわずかであったので、すぐ売切れたようである³⁹⁾。1746年に、トゥアム Tuam の副監督であったジャーヴァイス (Isaac Gervais, 1680—1756) が当時のアイルランド総督、チェスタフィールド (Chesterfield, Philip Dormer Stanhope, 在任, 1745. 8. 31—1747. 9. 13) の要望で、『質問者』を探したけれども、書店では1冊も見つけることができなかつたほどであった⁴⁰⁾。こういう事情がパークリイをして1750年に第2版の出版にふみきらせたようである。

- b. 初版と再版の違い パークリイが1750年に第2版をダブリンで出版したとき、新

38) *George Berkeley on Several Queries Proposed to the Public, 1735—37.* in Reprint of Economic Tracts edited by Jacob H. Hollander. (1910) の Preface p. 4.

39) ホランダール教授によると、世間に出ている『質問者』は1750—52年に出版された翻刻版であり、初版本は例のジョセフ・マッシーの『経済学文献目録』にすらその第1分冊しか記載されていないほど稀覯本であり、更に、合衆国には少なくとも初版本が2冊あって、このうち1冊はエール大学図書館の「ワグナー文庫」のなかに、他はコロンビア大学のセリグマン教授の蔵書のなかにある。(Hollander, *op. cit.*, p. 5 & fn. 9)

エール大学と云えば、パークリイゆかりの学府であるが、パークリイの幻のパンフレットとみなされていた“*Queries relating to a National Bank, Extracted from the Querist. Also the Letter containing a Plan or Sketch of such Bank.* Republished with notes, Dublin (Faulkner) 1737. Pp. 40.”もこのスターリング図書館で発見された。Cf. *Works*, IX. p. 159.

40) パークリイは1746年2月のプライア宛の手紙のなかで次のように書いている。「ジャーヴァイス副監督が、わがアイルランド総督の御要望で、『質問者』を探しておりましたが、書店には1冊もなかつたということを私は聞いております。貴兄から立派に製本して閣下に献呈して頂けないでしょうか。それが無理なら、せめて『質問者』全3部からの抜萃で出来ている、この前に出版した国立銀行に関するものでもお願いしたいのですが……。」(*Works*, VIII. p. 282) なお、ジェソップ教授は *Works*, VI. p. 90 fn 1. と p. 91. でこの手紙を1745年としているが、これは誤りである。

たに著者自身の序文 (Advertisement) を付け加え、初版と異なる点に触れているが、ここではこれまでの3分冊を1冊にまとめたこと、多くの質問——とりわけ、世間の関心の薄れたアイルランドの国立銀行設立に関するもの——を削除し、新たな質問を若干つけ加えたこと、ある友人⁴¹⁾の強い懇意で著者名を心ならずも表題に入れたことを挙げている。そしてこの第2版が後の版の底本となるのであるが、1750年から1752年までに刊行されたものを表にまとめてみると次のようになる。

このうち、1751年のグラスゴー本は、グラスゴーの出版業者ファウリス兄弟 (Rob. &

『質問者』の再版本 (1750—'52)⁴²⁾

年 発行地	1750	1751	1752
ダブリン	2版～5版		論文集 に収録
ロンドン	ダブリン本 第2版の翻刻	ロンドン本 第2版	論文集 に収録
グラスゴー		第2版を『エ コノミック・ リプリント』 に収録	

出所: *Works*, VI. pp. 89—90 & IX. p. 148. より
作成。

Andr. Faulis) が1750年から着手した周知の『^{エコノミック・リプリント}経済学翻刻叢書』のなかに、『賢者に一言』と共に加えられたものであるが、生存者のパークリイの著作がこの叢書に列する榮譽を得たのは、当時もり上ってきた経済学興隆の気運の故だけでなく、『質問者』そのものに対する識者の関心が強まったからであろう。また、

41) ‘ある友人’とは『質問者』の上梓に力のあったパークリイの一番の親友のプライア (Thomas Prior, c 1679—1751) か、さもなければ例のマドン博士のどちらかであろう。

42) ちなみに、アダム・スミスの蔵書目録である、いわゆる『ボナー目録』には Joseph Stock 編と思われる『パークリイ著作集』(1784) と、グラスゴーで出版されたファウリスの『経済学翻刻叢書』に所収のものが掲載されているが (*A Catalogue of the Library of Adam Smith, prepared for the Royal Economic Society by James Bonar, 2nd. ed., London, 1932. — Reprints of Economic Classics, Kelley, New York, 1966. — p. 25*)、スミスが『諸国民の富』(1776) に利用したとすれば、後者のものである。もっとも「スミスは弁護士図書館を利用した」(キャナンの序) そうであるから、これも推測の域しか出ない。

なお、マルクスが『資本論』等で利用したものは、1750年のロンドン版のようである。

パークリー自身も1752年に、書き下しの2篇を含む11篇の論文集を發行し、“その他”の部に『質問者』を加えている⁴³⁾。その後も、『質問者』は『著作集』に掲載されたり、あるいは単行本として翻刻出版されているが、ジェソップ教授によれば、「翻訳はこれまでのところ1冊も見付からなかった」⁴⁴⁾。

ところで、初版と第2版とは単なる形式上の相違だけにとどまるものであろうか。例えば、ハチスン是这样云う。「第2版は初版の質問のなかから主として比較的痛烈な言葉や皮肉な言葉で表わされたものを大部分削除したもので、両版の違いは後年のパークリーの性格をみるうえでは重要であるが、彼の經濟論を議するにあたってはあまり意味がない。」⁴⁵⁾ジェソップは第2版の序文を根拠にして、初版の主題は国立銀行の設立計画であって、第2版で除外された質問の大部分はそれに関するものであった、と述べている⁴⁶⁾。なるほど、『大ブリテンの破滅を防ぐために』を出版した頃のパークリーは、アイルランド銀行の設立にあまり関心がなかった様子であるが⁴⁷⁾、『質問者』執筆の頃にはその問題に大きな興味をしめし、事実、『質問者』の初版本の第3部の大半は国立銀行の設立方法に関する質問にあてられている。しかしながら、だからと云って、初版の主題が国立銀行設立計画であったと断定するのは早計でなかろうか。なぜなら、パークリーにとって、産業に対する資金供給と1国の貨幣量を調整する機能をもつ国立銀行は、經濟の成長と安定に不可欠な要素であったので、これの欠けた『質問者』は論理的にも到底考えられないところであり、また事実問題としても、初版から削除された質問数のうち52%しか『国立銀行に関する諸質問』のなかに含まれていないからである。そしてこの後者と同じ理由で、ハチスンの説にも納得できない。この問題については、更に内容的に立入った分析をしな

43) *Works*, V. p. 207 ff & VII. p. 373.

なお、ジェソップ教授はこの論文集に所収の『質問者』を決定版とみなし、『全集』に採録している。

44) *Works*, VI. p. 90. 『初期イギリス經濟学古典選集』(東大出版会)の第6巻として、パークリーの『たずねる人』がよいよ今年の春に刊行されるそうだが(『アダム・スミスの会報』第23号、昭和46年1月10日、14ページ)、ルース、ジェソップの『パークリー全集』第6巻(1953)が出版されて以来19年たっている今日、もしもその間にどこの国からも翻訳書がでていないならば、日本語訳は世界で最初の外国語訳となる筈である。

45) Hutchison, *op. cit.*, p. 53. fn. 1.

46) *Works*, VI. p. 91.

47) *Works*, VIII. p. 118. の1721年11月付、パーシヴァル宛書簡および IX. p. 47.

ければならないけれども、ここでは便宜的に掲げた次の表から、ハチスン、ジェソップの各説の一面性を知ることができれば充分であろう。なお、表中の(A)は初版、(B)は第2版(ジェソップの決定版)、そして(C)は初版本からの抜萃である『国立銀行に関する諸質問』をしめす。

『質問者』の初版と第2版、および『国立銀行に関する諸質問』との照合

部	(A)	(A)から削除された質問数	(B)に追加された質問数	(B)	(C)	(A)から削除された質問で(C)にあるものの数
I	317	81	34	270	97	46
II	254	119	11	146	83	59
III	324	145	0	179	100	75
合計	895	345	45	595	280	180

出所：Works, VI. pp. 96—100. の「初版と決定版との照合表」および IX. p. 159. の『国立銀行に関する諸質問』の質問数より作成。

c. 文体と意図 『質問者』はすべて修辭疑問文から成っている。このきびきびとして切れ味のよい独特の文体も⁴⁸⁾、経済学の著作では全く目新しいものでなかった。例えば、ペティ (William Petty, 1623—'87) の『貨幣小論』(1682年執筆, 1695年ロンドンで出版) やベラーズ (John Bellers, c 1654—1725) の『貧民論』でも同じ形式を使って

48) 例えば、バルファー (A.J. Balfour, 1848—1930) は、サムプソン編『パークリイ著作集』(1897—8)の序文で、『質問者』の形式に賛辭をよせ、595の脈絡のない質問は「読みやすくできている。たしかにそれは読みやすい。だが読みやすいだけでなく、印象的である」(quoted in Works, IX. p. 102)と述べて居り、またフレイザー教授も、『質問者』は「一種独特の文学的表現がみられ、ユーモアと皮肉を兼ねそなえているため、この著作を英語で書かれたどのような類似の書物よりも、1人の愛読者にとって一層興味深いものになっている」と称赞しているのに対して、他方、ダンロップは「パークリイが自分の思想を提示する形は、読者にとって頭の早い回転 a degree of mental agility を必要とし、不必要な反復が多くて、質問の論理的筋道が必ずしも明白でないから、読者が余程の共鳴者でない限り、たいくつするであろう……」(R. Dunlop, Bishop Berkeley on Ireland. *Contemp. Rev.*, London, 1926. vol. 129. p. 763)と云い、前の2人とやや異なった評価を下している。筆者はどちらかと云えばダンロップの意見に共感を覚える。

いるからである⁴⁹⁾。パークリイがこのような文体を用いたのは、これが初めてではなく、すでに1734年の『分析者』*The Analyst*と1735年の『数学における自由思想の擁護』*A Defence of Free-thinking in Mathematics*. で同じ質問形式を一部採り入れている。例えば、『分析者』では、「読者がこれまでのべたこと the foregoing remarks の真意と^{フォース}意図をもつとはっきり理解でき、読者自身の頭 meditation でそれらを一段と深く考究できるよう」最後尾に67の質問をつけ加えている⁵⁰⁾。

しかしながら、『質問者』の場合には、単に読者をして考えさせるだけでなく、「ある質問には Yes という答えを期待し、またある質問には No という答えを期待して」⁵¹⁾ 読者を知らず知らずのうちに、彼の論理にひきずり込むのにこの形式が最も適当であったのであろう。更に、パークリイがこのような形式を採った理由を、彼の性格と関連させて、ジュソップ教授は次のように云う。「恐らく質問形式が簡潔さを好み、風刺を望む彼の性格にあったものであるということを彼が知ったからというところではないだろうか。いずれにしても、それがぴたりしたものであったことは結果が示している。或る個所では彼は驚きを示してさらっと書き流し、他の個所では困惑を示して針でチクット刺し、また別の個所では眼を輝かせそして警句をちらつかせる。あてこすりや非難が完べきな程巧みなため、私心なき読者はつい喜びにさそわれる。文学的な見地からこの作品は天才的な警句家の労作である」と⁵²⁾。パークリイ研究の第一人者ならではの鋭く温い言葉である。

ところで、これ以上われわれは『質問者』の文体論にまで手を上げるつもりはないし、また語学の才乏しき者にはとても出来ない相談である。ここでは、『質問者』の一種独特のすぐれた文学的表現が当時の人々の心を深くとらえていたことも、今の世の人でありながら、ファウリスの『経済学翻刻叢書』に名を留める一因であったのではないかという推論の根拠を提示したにすぎない。

49) Hollander, *op. cit.*, p. 4. なお、ホランダー教授によれば、「『質問者』の文体は18世紀におけるアイルランド人とイギリス人の経済学に関する著作のなかに受けつがれるかもしくは模倣された」(*ibid.*, fn. 6)

50) *Works*, IV. pp. 95—96. Cf. Hollander, *ibid.*, p. 4.

51) *Works*, IX. p. 101.

52) *Works*, VI. p. 90. 小泉八雲もかつて東京帝大でイギリス文学史の講義をした際、パークリイを取り上げ、「その文学的性質に於て、將た、その哲学的力量に於て、彼と同代の人々の間で第1位に置かるべき人物である」(『小泉八雲全集』)と賞賛したそうである。(大規春彦「イギリス古典經驗論と近代思想」『世界の名著 27』昭和43年6月、中央公論社、58ページ。)

さて次に、パークリイの『質問者』を書いた意図が奈辺にあったのかをみてみよう。『質問者』の第2版の序文には、パークリイが身を僧職におきながら、分を弁えず俗界のことに容喙する疚しさを弁明している個所がある⁵³⁾。そのところで、パークリイは、『質問者』公刊の動機を「人類に少しでも役立たせたい」というヒューマニズムに求めているけれども、その意図については何もふれていない。彼が『質問者』の意図について述べたのは、1737年4月、『質問者』の第3分冊発売中、「質問者」というペンネームで新聞に寄稿した『国立銀行設立計画に関する公開状』Letter on the Project of a National Bank のなかにおいてであった。

「『質問者』は実のところ物事をたずね指針をしめしているだけであって、立法府を賢明な方向に動かそうと思っているのではありません。」⁵⁴⁾

「困難な国立銀行の計画立案と実現にあるというよりはむしろ公共の福祉と、このような銀行が同じ結果をうながす傾向についての正しい意識を人々にもたせることにあるように思われます。これらの点を道理と事例の両方から説明し、よくわかるように説得することが、この重大な事態に何をなすべきかを人々に考えさせるようにするための指針を沢山含んでいる……『質問者』のねらいでありました。」⁵⁵⁾

このようにパークリイの意図は立法府に対する提案ではなく、人民に対する啓蒙にあ

53) 「私が自分の職業をもかえりみず余計な世話をやいていることに対して、別の折りに受けたと同じ非難をここでも予想しています。たとえ偽りのない勤労を勧めることにより、飢えた者には食物を、着ざる者には衣服を与えることであっても、多分それは今なお共和国の一員であると考えている僧侶にとり、分不相応な仕事であるとは見なされないでしょう。

人間の幸福の絶頂は心身の健全と富にあると思われるので、以上の3つの各項目に関して、私はあえて私の研究を人類のために少しでも役立たせたいと思えます……。」(Works, VI. p. 103)

パークリイは僧侶の経済学の分野への侵蝕について疚しさを感じているようであるが、しかし、それは18世紀のイギリスにおいて珍しいことでなかった。ケインズが云うように、「ヒュームとアダム・スミスのようなスコットランド人、そしてマンデヴィルとカンティヨンのようなロンドン在存の外国人を除けば、僧侶——多くの場合、国教会の高僧たちであったが——以外で政治経済思想の展開に重要な役割を果たした者を私は誰1人思い出すことができません。」(F.A. Ironmonger, *William Temple*. 1948, p. 439. — quoted in *Works*, VI. p. 96)

54) Works, VI. p. 185.

55) Works, VI. p. 187.

ったことがわかるのであるけれども、果してそうであろうか。それは表向きのことであつて、本音は矢張りイギリスとアイルランドの両立法院に対する政策提言にあつたのではなからうか。と云うのは、例のパーミュダ計画の失敗で世間から狂人呼ばわりされ、とりわけダウンの副監督就任をアイルランドの立法院の反対によって断念させられるというつらい浮目にあい、いまだに疑惑の目でみられていた彼が、定住後1年半そこそこで権力者を邪掄るだけでなく、太々しくも俗界のことに容喙したということが知れるならば、まともや権力者たちの反感をかうようになることを恐れ、そこで『質問者』の意図を「人民に対する啓蒙」ということでカムフラージしたのではなからうか。彼が「立法院を賢明な方向に動かそうと思っているではありません」と書いたすぐ後で、「しかし質問を提案にかえようと思えば、それも出来なくはないであります」⁵⁶⁾と云っている点、更に、1746年、彼は『質問者』のなかで国立銀行設立計画を取扱った部分が新任のアイルランド総督の目にとまるよう友人のプライアに頼んだという事実は、このことを裏付けるものではなからうか。だが、『質問者』の意図が表向きであれ、本音であれ、パークリーの立場というものは、「当時……おびたしい数にのぼつた^{エコノミツク・パンフレッター}經濟時論家にしみ渡っていた経営や金融あるいは政党政治の利害関係から著しく自由であつた。」⁵⁷⁾そしてこの何ものにもとらわれない公平無私の立場で実際的な問題を深く考えるという特徴をそなえた『質問者』は、当時の經濟論のなかでもユニークな存在であつたと云えよう。

最後に、『質問者』の方法について簡単に触れておこう。パークリーは一般的原理から個別的原理を導き出すいわゆる演繹方法をとらずに、彼が活躍の本拠にしていたクロイン周辺の身近に観察しうる個々の具体的事実にもとずいて行なつた個別的实际的な提案から自らの主張を帰納している。ハチスンの言葉を借りれば、「パークリーは1組の体系的な一般に承認された定義や仮説、すなわち‘思考の用具’を勝手に考えたり創り出そうとしたのではなかつた。彼は1組の実に常識的な提案に大きな関心と深い同情を寄せ、そして殆んど副産物として自分のプログラムを支持し説明するために最低限度必要な理論と分析をとり入れる気になつたにすぎなかつたのである。」⁵⁸⁾

したがって、そこには組織立つたものがなく、彼の疑問形式という特異な文体とあいまって、一見「質問の論理的筋道が必ずしも明白でない」(ダンロップ)けれども、各所に

56) *Works*, VI. p. 185.

57) Hutchison, *op. cit.*, p. 54.

58) *Ibid.*, p. 53.

散見される考えを整理すれば、「整然たる理路がみうけられるのである。」⁵⁹⁾

d. バークリーの経済観 では、『質問者』のなかで理路整然と主張されたことは何であろうか。冗長という誹を甘んじて受ける覚悟で、ジェソップ教授のすぐれた解説を引用してこれの答えに代えよう⁶⁰⁾。

「バークリーはアイルランドの経済的窮状の処方を書いている。彼の語調は鋭い。アイルランドの貧民問題から先に着手せよと彼は云う。貧しき者たちにおいしい食物の味を覚えさせよ、ぼろ服の代りにちゃんとした服を着させよ、そして裸足に靴をはかせよ。と云うのは、よい物を使い、そして続けてそれを使う見込みがあれば、貧しき者も働く気を起こすであろう。このようなインセンティブが彼らの許し難い怠惰——働けばほんの僅かでも貧乏から免れることができるのに、それを選ばず貧乏であっても働かない方を選ぶという——に対する唯一の矯正法である。4つの要素が与えられると、⁷⁻²仕事⁷⁻²があらゆる富の源泉である——土地は耕作されない限り富の源泉ではなく、貨幣は“チケット”すなわち財貨が生産されず、貨幣が名目上財貨の章標であるならば、貨幣は1片の単なる金属ないし1枚の紙切れにすぎないので、富の源泉ではない。アイルランドが貧しいのは仕事の行なわれるのが余りに少ないからである。したがって、貧民や犯罪人は勿論のこと婦人や子供たちまでも働かせよ、彼らが常時牛肉をたべ、上着をつけ、靴をはくようにさせよ、そうすれば彼らは人間として取扱われよう。そして一度味をしめると、必ずそれらを求めるであろうし、それらが必要になれば彼らに労働意欲が芽生えるであろう。このようにすれば富を生産する人手の損失であるところの移民は阻止されるであろう。

現在の怠惰な人々をどういふように変えることができるであろうか。事実、ある国民が何を生産し、何をかうかは通常必然的に決まるものではなく、慣習や流行によって決まるものであり、したがってまた慎重な立法によってそれを修正することができる。あらゆる種類の売買が経済的にみて善^{グッド}であるのではない。アイルランドの困難の一部分は、この国の支配階級は自らを支えるべき経済がイングランドのそれと異なっているにも拘らず、イングランドの風習だけをまねているということである。——事実、彼らは外国産のワインを自分達より裕福なイギリスの従兄弟たちよりも沢山飲んでいる、それも健康や楽しみのためというよりもむしろ虚栄のためにである。それ故、外国商品を購入する場合には理性を働かせてかうべきであり、そして奢侈取締りのための諸法規はそうするための1手段で

59) ジェソップ教授の言葉。Works, VI. p. 91.

60) Works, VI. pp. 93—95.

なければならない。フランスは何も見返りに買ってくれないのに、どうしてアイルランド許りが主にフランスから買うのであろうか。アイルランドがパンを輸入し牛肉を輸出している限り、またアイルランド人民の大部分が食べるものも食べず、着るものもまともでないのに、ワインや絹を輸入してその支払いに羊毛をあてている限り、そこには社会意識もなければ経済観念もない。したがって輸入を削減し、国産品をふやし、できる限りそれで暮らすべきである。輸出品は実際に必要とするものか、または奢侈でなくて仕事を創り出すものに限るべきである。順なる貿易差額は、それが金銀だけしかもたらさない場合やそれらが高価なだけで安っぽいものや異国情緒の飲みものを買うのに使われてしまう場合には、何ら国を富ませるものではない。羊毛貿易の損失に関しては、労働を他の方面にあてる、例えば羊をへらして余分な牧草地を耕地に転換し、羊の見張りに要した以上の人手を必要とすると共に、それを扶養するところの小農地をつくることによって、かてて加えて、イングランドが海外各地から輸入している商品のうち若干のもの、例えばリンネル製品、および麻製品、カーペット、紙そして書籍と絵画と彫刻——わが国には文化面でとるべきものがあるので——を制作することによって、われわれは羊毛貿易の損失に応じることができる。われわれはイングランドの感情をそこなわないような対外貿易とイングランドの感情をそこなう可能性のない国内貿易を考え出すことができる。現状はどうかということを知るためには両貿易の統計をもつべきである。

産業の成長には貨幣を必要とするが、しかしその場合の貨幣は真に公共的な機関によって調整されたものである。地金を蓄積するだけでは意味がない。スペインはそのために弱体化した。金銀は、それが労働を誘起し維持しなければ無価値である。それらは信用の一形態にすぎず、また多くの諸目的のために信用は紙の形をとったものが非常に便利である。なんらかの鑄貨は不可欠であり、われわれが鑄貨をつくるためにわれわれ自身の造幣所を緊急に必要としていることは事実である。しかしアイルランドでは、銅は貴金属よりもはるかに利用価値が多い。けだし普通の取引きさえも容易にするのは現在著しく不足している小額鑄貨であり、流通速度の早い少量の小額鑄貨は流通速度のおそい高額の鑄貨に等しいからである。紙券信用もまた譲渡が容易であるばかりでなく、貿易を強化し公共事業を促進する有力な手段でもあるので、必要でありそれもわれわれが現在有している量よりも多く必要である。紙券信用を適度に保ち、公益にしたがわしめ、不当利得行為や富を何ら形成しない株式売買の仲介を行なわせないでおくために、国立銀行がなければならない。以上の諸条件——すなわち、あらゆる人々が忙しく働き、仕事の種類が考えたすえに選ばれ、生産物が公平かつ意識的に分配され、そして貨幣的分配手段が公的に統制される

こと——が満されるならば、この自然に恵まれた土地において、全国民に必需品が充分に供給され、やがて慎しみ深い国民が、健全な生活だけでなく優雅な生活をするために適切かつ安全にもつことのできるような奢侈品を買うことのできる余力が生じるであろう。

これこそパークリイが形のうえでは何ら関連のないようにみえる一連の警句のなかで明らかにしている概要である。そこには苦もんの叫びがあり、耳の痛い話が充満している。その中の詳細な事実にもとずいた知識と確固たる実行可能性は彼が単なる夢想家にすぎないという伝説を追い払うであろう。』

D 『サイアリス』と『賢者に一言』——パークリイの虚像と実像——

パークリイが『質問者』のなかで、抽象的な一般原理の展開に終始することなく、個別具体的な提案を行なうことができたのは、彼の実践的性格にもとずいていた。パーミュエダ計画もそのような性格の発露であったが、クロインにおいても、彼はただ祈ったりペンで主張するだけに留まらず、自らの提案を裏付けるための実践活動を行なっていたのである。例えば、怠惰な土着民にいわゆるアスピレーション効果を通じて労働意欲を起こさせるため紡績塾 spinning school や労役場 work house を建てたり⁶¹⁾、自ら経営する農場で100人以上のものを雇用して職を与えたりした⁶²⁾。

61) 1737年3月5日付プライア宛の手紙の中でパークリイは次のようにのべている。「わたくしたちの紡績塾はますます盛況です。子供たちは硬貨で支払われることに興味^{アレジャー}を覚え始めております。わたくしの理解するところでは、彼らは自分たちの両親におかねを手渡さずに自分たちの衣服を買うために貯めているらしい。成程、わたくしは彼らをここまで育てることが容易でなく退屈であることぐらいはわかっていました。しかし、それが今に役立つであろうと信じております。わたくしはいま体の頑丈なくせに働かずしてうろつき廻っている者たちのために労役場を建てているところですが、彼らを仕事に就かせるために約2エーカー分の大麻を栽培しようと思っております。大麻の種の入手方法をお教え下さるか、でなければ貴兄の協会からいくばくかおわけ願えませぬでしょうか。貴兄からの亜麻の種が早く届くよう待ち望んでいます。」(Works, VIII. pp. 244—5)

62) 1741年6月7日付ジョン・ジェームズ宛の長文の手紙の結びで妻のことにふれ、パークリイは次のようにのべている。「彼女は近頃たくましい百姓に成長しています。この厳しい時期に農業とは名ばかりのところ、わたくしたちは毎日100人以上の人たちを雇っています。」(Works, VIII. p. 155)

なお、パークリイは『質問者』のなかでも、『イソップ物語』の「牛追いとヘラクレス」の寓話をひいて、アイルランドのいま必要とすることは祈りではなく実践であると説いている。(初版第3部第1, 再版第417の質問)

彼の実践活動は経済の分野だけでなく、‘タール水’の事件で周知のように、医学の分野にまで及んでいた。1739年にアイルランドで始まった飢饉の際に熱病が蔓延し、クロインでも彼の身边で多くの人々が病にかかり死んで行くのを間の当りにみて、パークリィは病人に宗教的な慰めを施すだけでは我慢できず、パーミュダ計画でアメリカに滞在していた間に仕込んだタール水の薬効についての知識を利用して住民の治療に献身した。極貧の者でも買えるほど非常に安価で、それを服用するのに生活が乱されることもなく、幼児にも安心して与えることができ、そのうえ万病に効くという庶民にとってまことに有難い効能をもったタール水⁶³⁾の福音をすべての人々に分ち与えるために、その調製法を著した本をパークリィは1744年3月にダブリン、4月にロンドンで出版した。哲学者カントのパークリィ観をゆがめさせる原因ともなり⁶⁴⁾、また後世の学者をして「哲学者がかつて著した最大の珍書のひとつであり、……学問になんらかの貢献をなしたとは思われない」⁶⁵⁾問題の書、『サイアリス』*Siris: a Chain of Philosophical Reflexions and Inquiries concerning the Virtues of Tar-water, and divers other subject.* がそれであった。

パークリィが『サイアリス』を公刊すると、その反応は直ちにあらわれセンセーションをまき起した。医師や薬品販売業者の猛烈な反対や妨害にもかかわらず、庶民の薬としてのタール水を飲むことがひとつの流行になった。ロンドンには‘タール水専門店’ができ、1747年にはキャロライン王妃までもそれを服用されたと伝えられている。更に1744年7月、当時オックスフォード大学の学生であったアダム・スミスが母親に「タール水は目下当地で大流行の万能薬です。それでわたしの持病の貧血と偏頭痛はすっかりよくなりました」という手紙を書き送っていることも、パークリィとスミスを結びつける興味深いエピソードである⁶⁶⁾。

この「珍書」を著した頃のパークリィは決して老いさらばいてはいなかったけれども、しかし、多年にわたる人生のつかれがこの期において一挙に訪れたようである。そのような状態のなかで、最後の力をふりしぼるかのようになり、1749年パークリィ64才のとき、『賢者

63) *Works*, V. pp. vi—vii.

64) 「カントはパークレを“独断的観念論”と規定しているのであって、この場合カントはパークレ後期の『シリシ』に拠っているのである。」(山崎正一『近代イギリス哲学の形成』1950, 春秋社, 43ページ)

65) 前掲『イギリス科学哲学雑誌』の編集者覚え書。

66) Lord Brougham, *Lives of Philosophers* (4th ed., 1862), p. 280.—quoted in *Works*, V. p. viii.

に一言』がダブリンで出版された。ウィリアム・ペティの戦費調達論である『賢者には一言をもって足る』(1665年頃執筆, 1691年出版)とよく似た題名のこの書物は、『質問者』の補論的な性格をもつものである。そこではアイルランド土着民に直接訴える形をとり『質問者』のなかでは冷笑とも諦ともつかぬ形で取扱っていたアイルランド人の怠惰, 貧窮, 不潔さの問題を厳しく批判し, 道徳的な面の改善なくしてアイルランドの物質的改善のありえないことを説き, かれらの信望厚きローマ・カソリックの僧侶たちに, お祈りをするだけでなく, アイルランド人の貧困を取除けるような社会的努力を行なうと同時に, アイルランド人が主体的に自らの道徳を変えるよう僧侶たちが積極的に活動することを要請している。'最後のベスト・セラーズ'⁶⁷⁾を出版し終えたパークリィは, ひとり学問の世界にとじこもる歎びを束の間あじわった後, 1753年1月14日, あと僅かで68才に達するというとき, やすらかに死の旅路へ向ったのである。

付 記 この小論は松永記念科学振興財団の助成による研究報告の1部である。

本稿および続稿は, 昭和43年1月27日の学史学会関西支部会で既に報告し, そしてある事情で筐底に保存していた草稿に, 今回若干加筆して公表したものである。

67) *Works*, VI. p. 233.